

初期日蓮教學史と本迹論

布施 義 高

一

日蓮教學史上の本迹論研鑽は、凡そ室町期以降に極点に達したと見られる。拙稿では、そのことを視野に据えながら初期日蓮教學史における本迹論の特色を少しく尋ねてみたい。

初期日蓮教學史における本迹論を見ていく場合、先ず注目されるのは、日蓮直弟の所論と方便品読不読論争であろう。

日蓮直弟の本迹論は、不明な点も多いが、例せば室町期勝劣派の文献が記録するところでは、本迹勝劣義に立脚した直弟として日興、天目、日弁、日目、岡宮光長寺の日春・日法―等、一方、本迹一致義を明確に打ち出した諸師として、六老僧では日向、中老僧では日源、日意(位)等の名を挙げている。また、日昭に本迹の沙汰はなかったが、その後、日昭門流では日祐が天台宗与同の本迹一致義(本迹実相同)を立てたこと、日向門流では日向の後、特に藻原日海が目立って本迹一致を宣揚したこと、中山門流で一致義が確立されたのは日頂・富

本日常の後であること―等が記されている(『本迹高広義会釈』(二五一一―二)、法全教七―一五一―六三等)。

二

今日的に信頼できる文献から、日興(一二四六―一三三三)が正像末三時弘経次第(正法↓小乗・権大乘、像法↓法華迹門、末法↓法華本門という仏法流布の次第)に依拠して法華経本門に立脚し、日蓮を久成釈迦仏の付属弟子Ⅱ本化上行菩薩と位置付けていたことは紛れもない事実である(興全二八、二八六以下等 ※但し、比叡山を迹門弘通の迹門寺と規定し、対する末法本門弘通の拠を本門寺とし、その地を「富士山・蓮花山・大日山」と記す等、日蓮遺文を超えた日興独特の理解も見られる)。

かような日興の本門重視は、日興と関わった初期興門諸師に継承された様子を確認できる(例、宗全二所収『申状』等)。

中老僧に数えられる天目(一二五七―一三〇八)の本門重視も、日興からの修学により形成された面があると見られ(興

全二九八―九等)、これが迹門無得道↓方便品不読の主張へと進んだ如くである。身延日進(一二七一―一三三四)の著と伝える『本迹事』や中山日全(一三四四)の『法華問答正義抄』(一三三三―三四四)では、天目が、日蓮は佐前に方便品を讀誦していたが佐後に迹門十四品を捨て一向本門を行じたと云い、或は涌出・寿量二品の讀誦を主張したと記している(『本迹事』、興風叢書二―一四一以下、同一四―二四五以下等)。

而して、六老僧中の日興・日向(一二五三―一三二四)両師は、正安年中、それぞれ方便品(迹門)不読を義とする天目から問答を挑まれ、これに応じ(方便品読不読論争)、両師共に方便品の讀誦を天目に諭した。日興は如上の本迹觀を基に会通を加え(為_三所破。一説には借_三文証を加える)、日向は本迹兩門の価値を等しく重んじるべき所見(本迹同)を示した。一方、興門では、日興の後、仙代問答(一二三四)、日代・妙性問答、日代・日道問答―等と迹門(方便品)の読不読が論争され、日代が讀誦、日仙・妙性・日道が不読の旗幟を掲げた(宗全二―三九四、四四五等、富士要集六―五以下)。

また、初期日蓮教学史を繙くと、日弁(一二三九―一三二二)は既述の日向・天目の問答後、天目に同調し本勝迹劣を愈々振り翳したのであり、今日現存している天目集記日弁記『円極実義抄』写本(日授写本、甲斐小館常在寺蔵、宗全二所収)は有名である。また、日法(一二五八―一三四二)は『本迹相違』で、

初期日蓮教学史と本迹論(布施)

日蓮遺文や天台章疏を数多く挙げて本迹の研鑽を進め、天目の影響下、迹門無得道・迹門不読に立ったかの如き文言を吐露している(下巻九紙表、大平宏龍「日法聖人教学研究ノート」(桂林学叢一六)。周知の通り日弁・日法共に、弘安年中、曾ての日興の法系から離反した(興全一二二)中老僧である。

ともかく、こうした本門重視を打ち出す流れの中でも、殊に『五人所破抄』では「本実相」(興全三〇〇)、或は『本迹相違』(下巻十六紙表)や『円極実義抄』(宗全一―六五)では「本門極理」を日蓮教学の根本真理に見据えた論述が見える。更に、朗門九鳳の一人・日印(一二六四―一三二八)は、「本門三大事」(一二三七、宗全一―三一九)の弘通を第一とし、末法―日蓮―本門……等と図式化(「十箇条難問」、法全増一―二二六―八)する中で、迹_二權、本_二実とする本迹判に立った様子を窺わせている。即ち、此等は、室町期の勝劣論(実相勝劣論)へと繋がる先駆的な意味合いを有しよう(※因みに、日郷は、末法_二本門とする立場から、像法天台の所説を「法華迹門、理」と明示している(一三四五、宗全二―二七八)。

初期の勝劣論には、天台・伝教等の天台教学を、日蓮同様、本門立脚とする系譜も見出せる(『本迹相違』(下巻九紙裏)等)。総括的に言えば、初期教学史上の勝劣論は、末法_二本門の図式を描くも、本迹の約時と約説、或は五重玄義や根本真理論との関わり等を掘り下げて考究する段階には未だ至っていない

初期日蓮教學史と本迹論（布施）

ない（※また、例せば、管見の限り、初期教學史文献中、『觀心本尊抄』『四十五字法体』（定遺七一二）への着眼は存しない）。

三

先述した天目と日向の問答は、正安四年（一二〇二）正月二十八日に執り行われた（『本迹事』二丁裏、録内啓蒙一八一）。※尚、『本迹事』では、一口の陳答もなく天目は退散したと記している（三丁表）。『本迹事』によれば、日向の所説の骨子は、日蓮遺文中に本迹相違の記述があることを認めつつ、

於二部内一字一句不可捨之旨有之。（『本迹事』三丁裏）

の義が同時に存すると主張するものであったと云う。その文証として日向は、『開目抄』（此経：六万九千三百八十四字：一々に皆妙の一字を備へて三十二相八十種好の仏陀なり。）（定遺五七〇）『真間釈迦仏供養逐状』（定遺四五七）を掲げながら、是則本迹雖殊不思議一ノ意歟。（『本迹事』三丁裏）

と論じて、方便品読誦を積極的に肯定したことを伝えている。

日全の『正義抄』によれば、日向は天目に対し、日蓮が晩年まで一貫して、毎日の所作として方便品・寿量品を読誦されていたこと、天目が主張する涌出・寿量二品重視が日蓮の重んじた「一品二半」と異なること―等を説き反駁したと記している（興風叢書二一一四以下、同一四一二四六以下等）。

更に、『円極実義抄』では、昭朗興向の四師は朝夕の行が

本迹（方便品・寿量品）に亘ると主張し（宗全一一七三等）、『五人所破抄』によれば、日興が五老僧の所論を像法天台の迹門正意論に与同したものと批判している（興全二八八以下）。

而して、如上の方便品読誦論は聽て『觀心本尊得意抄』『四菩薩造立抄』『授職灌頂口伝抄』『法華本門宗要抄』等、日蓮の名に仮託した偽書の作成を促すに至ったようである（池田令道「天目・日向の方便品読誦論争について」（興風一七））。

池田令道師（同上）・花野充道博士（『立正觀抄』日蓮真撰説の論証）（法仏研八）が既に指摘された通り、中老僧の一人、身延日進や、日進から修学した経歴を有つ中山日全は、日向の所見を深める形で本迹の同・異を研鑽した。両者共、日蓮遺文のみならず、経釈中の本迹勝劣をも明瞭に認めている。

『本迹事』を検すると、日進は日向同様「本迹雖殊不思議一」を重用し（二丁裏）、本迹の同異両面から日蓮遺文を広く集記し検討する作業に尽力したことが窺える。また、『正義抄』によれば、日進・日全共に、本迹の教相（↓久近）上の異なり（人〓仏菩薩の久近の相違）を認めつつ、所得の実相妙理〓題目（法）に本迹の不同なし（不思議一）と捉えていることが了解されるのである（興風叢書一四一二三五、二五七以下）。

斯くして、この時代、向門、常門、朗門各教学には交渉の足跡が認められ（執行海秀『日蓮宗教學史』）、このような学説が日蓮教団の主潮を形成していった面が存すると見られる。

—以上、教学史上、最初期の段階において、日蓮遺文中に見える本迹の浅深勝劣（本迹相對）の面と、方便品（迹門）・寿量品（本門）読誦の化儀の面との整合性が問われ、後者の意義を考究する中で一致論が発達して行った様相を確認できよう。そして、天目と日向の方便品読不読論争の中に、その契機が顕著に見られることが注目される（池田・花野両師稿各前掲論文参照）。然も、本迹一致論史の中でも柱となった原始天台教学の「本迹雖殊不思議」一重視が、日向の本迹論の中に早くも登場したことは注目に値し、これが、その後の、日蓮教学の根底に天台教学を躊躇なく重ね合わせる学的傾向を促進せしめる大きな要因ともなったと推されるのである。

尚、『本迹事』（三丁表等）『法華問答正義抄』には、日進や日全が使用した成語の中に「本迹勝劣（本勝迹劣）」が見えている。が、「本迹一致」のタームは未だ存しない。管見では、「本迹一致」の成語を用いた最初期の文献に、『円極実義抄』（宗全一八三）や興門日代の書（同二二三六）等がある。

以上のような日向以来の学説は、明らかに、後に成語化される「一往勝劣再往一致」の源流を成すと見做し得よう。

「一往勝劣再往一致」のタームを最初に用いたとも指摘される、妙顕寺日像（一二六九—一三四二）の書と伝えられて来た『祈祷経之事』（宗全一一二二六、法華経一部の一々文々是真仏、本迹二門の一往勝劣再往一致を説く）や、『本迹口決（祈祷経之事

紙背）』（同二三〇—一、中古天台教学的な機情勝劣仏意一致説—等を説く）の実際の著者は、近時、坂井法暉師によって妙顕寺五世朗源（一三三六—七八）と割り出された（「日像上人伝承考」（興風一九）。故に、「一往勝劣再往一致」の成語の成立乃至流行は、従来の見方より稍時代が降ることになるう。

室町期の日陣（一三三九—一四一九）は、従前の主立った学説として約仏勝劣約法（実相）一致の説（日用・日竜・日弁・日叡・日長）を挙げ（法全増一—三三三等）、その約仏が約宗と置き換えられるところに大智院（『本迹難』の実質的執筆者）の約宗勝劣約体一致が成立したと説明している。上記の事柄は、初期日蓮教学史における、そうした系譜の生成過程を鮮明に示すものであろう。尚、日陣は日什（一三三四—九二）の所論もこの系統と論じている（以上、法全増一—三三二以下参照）。

四

また、看過できないのは日進、日全の本迹論が、明らかに、日本中古天台の中で原始天台を基盤に久近本迹の理同事異を打ち出した流れと同一思潮に立つことである。事実、日全に至っては、叡山で修学した林泉坊末流の相伝を重んじて本迹論を展開したと自ら認めている（興風叢書一四—二三〇等）。

而して、かような学説から一步進んだところに実は、中古天台独特の本覚思想の色彩を帯びた本迹相對説（迹門〓始成

初期日蓮教学史と本迹論（布施）

—始覺—不變—斷惑—理常住……、本門—久成—本覺—隨緣—不斷惑—事常住……と配する。例、仏全一六—三九等）が存在する。『日向天目問答記』（録内啓蒙一八—八一、※池田令道師は、本書の作者を或は及河宗明と推測されている〈前掲論文〉）や『円極実義抄』（宗全一—六九等）にはその影響が見えている。或は日全も叡山遊学中にかかる系統にある本迹相對説を見聞していたことが窺えるのである（興風叢書一四—二三一、二三三）。

他方、日蓮教学史を通じて、教相勝劣観心一致の学説が本迹一致論の中軸となったかの感がある。室町時代初期の藻原日海（一三三六—八九）の所論はその嚆矢であり（執行海秀前掲書六〇）、中古天台独特の四重興廢判が根底に置かれた（『本迹問答』十一左）。この点、『本迹高広義会釈』では、昭門日祐（一二七—一三六四）の一致論（本迹実相同）を、教相勝劣観心一致と評しており（法全教七—一五一）、かかる学説の原形は、初期の昭門教学にも既に胚胎していたようである。

猶、四重興廢判は、日蓮教学史最初期の段階から、その受容如何が問題となったようで、『五人所破抄』や『本迹事』では四重興廢を受容せんとしたかに映る叙述に出合う。但し、『五人所破抄』では「終窮究竟之本門」（興全二九九）「本門五字」（同二九二）を至上の法と定め、本迹から遊離した観心を樹立せんとしたものではなかった。他方、『本迹事』では、像法天台・末法日蓮共に本迹の上に観心を立てると見て、天台宗

は観心を己心中所行法門（迹門の理の一念三千—止観）、日蓮の場合、観心を題目（「一念三千」と奠めると云う（※日向が日蓮の所作次第とした方便品↓寿量品↓題目は、迹↓本↓観心の次第の意味、とする）。ここでの天台教学観は、像法天台↓迹面本裏・迹門（理具）一念三千とする日蓮の所論（定遺七一九、一五二二等）が実質的に覆されているといえよう。

因みに、『十二因縁抄』（一三三三、平賀日伝、宗全一—三〇二）や『本尊抄私見聞』（伝富木常忍作、※実際は中山三代日祐以降の作。同—一五八）では四重興廢の観勝教劣を僻見と破した。

以上のように、日蓮教学史初期の段階における当時の日本天台では、既に本迹同異の議論が喧しく、四重興廢判も大きく取り上げられ、当時の日蓮教団における教義研鑽上の問題意識と相俟って（後には教団拡張を最優先する意向とも絡まり）、日蓮教学に甚大な影響を与え—厳密にはその受容には種々相が見られる—、本来の日蓮教学からの懸隔を拡げて行った面がある。こうした勢いを憂い、室町期以降、日蓮教学の存在理由を問い直す動きが活発化することになるのである。

五

さて、既述の『円極実義抄』は、爾前・迹門・本門の円に次第勝劣を論じ、『十章抄』（真実の依文判義—本門、定遺四八九）や『開目抄』（本因本果の法門↓真、一念三千、同五五二）等によつ

て本門を究極の純円と定めている。更に、本門の極円に相待妙（破迹顕本）と絶待妙（本迹無二無別）の二面を論じ、本迹両円の相違の本質を久近本迹の事異とし、一面、本迹の理同、観心重の本迹同を認めた如くである（宗全一一六五等）。

前述した、『本迹事』『法華問答正義抄』に記す、未だ素朴さに充ちた天目の学説を基準に見た場合、『円極実義抄』での学説及び考察の様相は、一面、室町期の勝劣論（日陣の本迹実相勝劣論―等）に相当接近する域にまで進展している。

従って、本書の成立は、日向との問答（二三〇二）後、天目入寂（一三〇八）迄の間に、従前より知見の深まった天目説を、天目に同調した日弁が集記し自説（私云）を添えたものと推察することが、一応、可能であろう（※望月敏厚博士は「鎌倉円成寺以後の作」と推定する（同著『日蓮宗学説史』四六））。

加えて注視すべきは、本抄には日授の奥書執筆年（一四七六）を成立年代と推定する説が既に存することである（堀日亨師の説。執行海秀前掲書二九以下、同著『御義口伝の研究』等参照）。

天目集記日弁記が疑問視される要素は『円極実義抄』中、確かに少なくない。例えば、『本迹事』では天目の迹門不説説が確立した時期を正安三年と明記しており、これは、『円極実義抄』が記す、正安二年五月十日以降に天目による迹門無得道の立場からの本弟子（日昭・日朗・日興・日向）批判が開始されたという記載（宗全一一七三―四）と噛み合わない。

初期日蓮教学史と本迹論（布施）

更に、『円極実義抄』では、昭朗興向の四師を迹体為正論者（迹門極理立脚）と規定し、その有力な論拠を「本迹雖殊不思議一」等の原始天台章疏（正蔵三三―八二〇下、同三四―三五〇上等）に置かれていたと記録するのであって、前節までの概観で確認できた事実からの乖離は問題なしとしない。然も、同じく日向との論争後の記録とされ、天台・妙楽・伝教・日蓮を皆、捨「迹立」本とし、開本両抄中心主義を標榜して本門序正流通の末法為正を打ち出す『本迹問答七重義』（宗全一一四八）からも、相当に進展した叙述が見られる（例、「理常住・事常住」、「理円・事円」といった術語の依用―等）。

後に天目・日弁の流れは、天目門徒とも、鷲巢門徒とも呼ばれ、天目を唯一正統と鼓舞して上代日蓮教団に激しい本迹論議を巻き起こしたことが窺える（興風叢書一四―二四五以下等参照）。そうしたことを慮ると、『円極実義抄』は、後世、この天目（鷲巢）門徒の手により、「天目集記日弁記」として作成された可能性―等も想定されて来るように思われる。

而して、若しそうであれば、本書の成立は文明八年（一四七六）と見るべきなのであろうか。また、本書は上下二巻（上巻欠）と伝えられるが、元々は下巻が一書として成立していた可能性を示唆する声もある（渡邊寶陽稿「本迹論の展開」）。

ここで私は、円光日陣の『雜聞書』（一四〇四―五、日陣講義日台筆録）に『円極実義抄』の書名と一節が次のように掲

初期日蓮教学史と本迹論（布施）

げられていることに注視したいと思う（法全増一——一三〇頁）。

天目、円極実義抄、中ニハ本迹教相之時天地ノ勝劣観心之日ハ一致云

これに対して日陣は、教観各別と批判を加えたが（同一三一等）、少なくとも、日陣の頃には、『円極実義抄』が日蓮教学界に知られ、天目の書と伝えられていたことが分かる。

尚、ここで掲げた引用文傍線部は、『宗全』第一巻掲載同抄中、該当する文言が存在しない。勿論、現存下巻本文からの取意（例、宗全一——一六八等）という可能性もあるが、このことは、『円極実義抄』には異本があつて、そこに現存写本以外の部分（説示）が存した可能性があることを窺わせている。

その意味で、注目されて来るのは円明日澄の『本迹決要抄』（二四九二以降の成立）である。同書では、『円極実義抄』の記述として、【①末法における朝夕の行儀↓唱題↓正行、寿量一品読誦↓助行とする記述（下三丁左——四丁右 ※望月歆厚『日蓮宗学説史』五一頁にその一部の引文あり）】や、或は、

②又云天目ハ任御書ニ末法惡世ノ初心ノ行者ナル間捨爾前迹門ノ惡法一向ニ行本門純善ノ大法也 適時適機ナル耳 逆臣之弭ヲハ官兵ハ無指事ニ寒食ノ祭ニハ禁火ヲ 本門流布ノ障碍ニハ爾前迹門ノ法是レ也 尤モ今末法ノ機ニ可禁制ス歟（下四丁右——左）

の記述を掲げるが、①②共『宗全』第一巻収載本に存在しない。また、『決要抄』には他にも『円極実義抄』が引かれるも（上三六丁左——三七丁右、下四丁右）、現存写本（宗全一——七三

——四）と多少字句の出入相違が認められることを指摘できる。

此等の事実は、『円極実義抄』に上巻、或は字句や内容の若干異なる、或は内容的に増補された形の異本（写本、若しくは真蹟本）が存在したことを証することになり、同書の成立を考究する上で見逃せない重要事項となるものである。

六

以上から、初期日蓮教学史上の本迹論は、方便品（迹門）読誦論を軸に致劣両論が展開したことを改めて確認できよう。

日蓮遺文中に、法華經一部（方便寿量両品中心）読誦の記述が見えることは歴然たる事実であり（定遺二九〇、五〇八、九二二、一八一〇——七等）、日蓮直弟も日蓮の方便・寿量両品読誦を伝えている（興全二九九、興風叢書一一——一四一等）。室町期以降の勝劣派の諸学匠にあつても、迹門不誦は邪義とされ（例、法全教七一——一五八等々）、一部読誦の化儀を前提とした教義の樹立が志向されている。上述のように方便品読誦をめぐって見解が二つに割れたことは、初期教学史における勝劣論、乃至本迹論全体の一つの特徴を示すものであろう。

今後、引き続き多角的検討を加えて行きたい。（細註略）

（キーワード） 本迹論、初期日蓮教学史、方便品読誦論争

（立正大学日蓮教学研究員）